

1 ～教育改革の新たな一歩 県内初 AI 英語学習アプリを全市立中学校で導入～

市長

本日は、教育改革の具体的な一歩として、9 月から県内で初めて、市内全ての中学校で運用を開始した「AI 英語学習アプリ」について、皆様にご報告いたします。具体的なお話に入る前に、今回の取り組みの根底にある、私の子どもたちへの思い、そして横須賀の教育に対する思いに、少し触れさせていたいただきたいと思います。

今、社会はかつてないスピードで変化しています。こうした時代にあって、子どもたちには、深い学びを通じて、自ら考え、予測できない未来をたくましく生き抜く力を身に付けてほしいと強く願っています。「生き抜く」ということが大切だと思います。そして、私が一貫して掲げてきた「誰も一人にさせないまち」という思い、困ったときにはお互いに助け合い、みんなが主役になれる学校であってほしい、子どもたち一人ひとりが、心から「ここにいてよかった」「横須賀の学校にいてよかった」と安心できる「誰も一人にさせない学校づくり」「安全・安心な学校づくり」を進めること、私は、こうした教育の充実が、これからの横須賀を支える大きな力になると考えています。「学び」と「幸せ」の拠点となる学校を基盤として、子どもたちが希望を持ち、人とつながりながら成長できる「まちづくり」を進めていくこと、これが、私の根底にある願いです。その確かな土台をつくるためには、これまで以上に学校現場を大胆に改革し、教育と社会とが一体となっていくことが必要だと思います。私は常々申しあげていますが、DX は目的ではなく、手段に過ぎないと考えています。機械でできることは可能な限り機械に任せ、「人にしかできない仕事」に力を尽くす。これは、学校現場においても全く同じです。教員には膨大な作業に追われるのではなく、子どもたちと心を通わせる「人にしかできない教育」に力を尽くしてほしい。そうした思いで、教育改革を進めていかなければなりません。このたび、その教育改革を進める新たな体制として、行政や民間など多様なフィールドで、教育とテクノロジーの最前線に立ってきた生田氏を、教育長として迎えました。これまでの慣例にとらわれない柔軟な発想と幅広い視野が、横須賀の教育に新たな風を吹き込んでくれるものと確信しております。そして、この新たな体制のもとで進める教育改革の具体的な一歩として、全ての子どもたちに「個別最適な学び」を提供するとともに「データ活用による教員の負担軽減」を実現する取り組みを始めます。それが、9 月から県内で初めて、市内全ての中学校で運用を開始した AI 英語学習アプリです。ここからは、私の思いをしっかりと共有してくれている生田教育長より、これからの教育改革のビジョンと、今回の取り組みについてお話しいたします。私からは以上です。

教育長

新たに教育長に就任いたしました、生田でございます。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。ただいま市長から、横須賀の子どもたちに対する思いが語られました。市長の「誰も一人にさせない」という強い決意に私も深く共感しており、こうした教育の姿を築き上げることが、これからの横須賀の未来を創る基盤になると確信しております。この点、スライド上部にありますように新たなミッションを掲げております。それは「学校が全ての人のための『学びと幸せの拠点』となり、未来への扉となる社会・地域の実現」です。全国的にも教育を取り巻く環境は大きく変化しています。本市においても、多様化する児童生徒のニーズへの対応や、全ての子どもたちの学びの保障、そして教職員の持続可能な働き方の実現など、直面する課題にしっかりと向き合っていく必要があります。この課題を解決し、乗り越えていくためには、私はいくつかの具体的なビジョンを描いております。まず、スライドの左側のブロックをご覧ください。学校が学びと幸せの拠点となる「教育の深化」です。これには 3 つの大きな目標があります。1 つ目は、「主体的で対話的な深い学びの実現」。2 つ目は、「誰も一人にさせない、包括性を高めた、学校づくり」。そして 3 つ目は、

「安全・安心な、誰もが安心して過ごせる居心地のいい、教育環境整備」になります。これらを実現する推進力として、下段にありますように「教育・学校 DX」の促進、教員の「働き方改革」の一層の推進、そして「学校と地域の連携」を一体的に進めてまいります。さらに、スライド右側に示しているとおり、「学びが未来への扉となる社会・地域の実現」も、重要な方向性となります。地域・まちづくりと連携した新しい「学び」「活動」「価値」を創出していく。そして次世代の横須賀を担う人材を、皆で育てていく。こうした考えの下で、教育が社会と、より一体となるよう新たな歩みを進めていきたいと考えています。「学校が学びと幸せの拠点となる教育の深化」そして、「学びが未来への扉となる社会・地域の実現」この 2 つの動きが、1 つに合わさることにより、先ほど市長が申しあげたように「子どもたちが希望を持ち、人とつながりながら成長できるまちづくり」へと、結実すると考えています。教育には、まちの未来そのものを創り出す大きな可能性があると考えています。このビジョンの実現に向けた教育改革は、今後様々な形で展開していきたいと考えています。本日はその取り組みの 1 つとして、9 月からスタートした AI 英語学習アプリの全中学校への導入について、説明をさせていただきます。こちらは、これまでマンパワーだけでは難しかった個別最適な学び、すなわち「一人ひとりに寄り添った学び」の機会の提供と「教員の抜本的な負担軽減」を同時に目指していく、そうした取り組みだと考えています。そして、AI によって生み出された時間を、先生方が本来持っている素晴らしい力、子どもたちへの温かいケア、指導、深いコミュニケーションに存分に注いでいただきたいと考えています。システムの具体的な機能につきましては、担当課長よりご説明いたします。私からは以上です。

横須賀市教育委員会事務局 学校教育部 教育指導課長（以下、教育指導課長と表記）

私からは、9 月より全市立中学校に導入しました「World Classroom（ワールドクラスルーム）」の具体的な機能と、現場での活用イメージについてご説明いたします。この AI 英語学習アプリにおける英語の「話す力」を伸ばす AI による英会話練習機能は、全国的にも注目されていますが、家庭学習や学校ごとの差をなくし、全ての生徒に等しくこの環境を届けるため、全市立中学校へ一斉に本格導入する取り組みは、神奈川県内初となります。公教育の質を底上げするモデルケースとしても、非常に先進的な取り組みと考えています。このプラットフォームを導入することで、生徒たちは授業時間外や自宅であっても、いつでもどこでもリアルな英語に触れ、実践的なコミュニケーション能力を磨くことができるようになります。このアプリでは、大きく 2 つの機能を活用し、生徒が自分のペースで学習を進めます。1 つ目は「英会話・音読練習機能」です。生徒が AI キャラクターを相手に英語で会話や音読を行うと、AI が瞬時に発音やアクセントの精度を判定してフィードバックを行い、スコア化します。自分がうまく発音できなかった部分を確認しながら、生徒が主体的に英語を話す習慣を定着させることを目指します。2 つ目は「プレゼン・ライティング練習機能」です。生徒自身がテーマに沿ってオリジナルの文章を作り、プレゼン動画の撮影までを行います。文章作成の過程では、AI が英文を自動でチェックし、添削のフィードバックを行うことでライティング能力の向上につなげます。また、速さを調整できるモデル音声機能があり、一人ひとりの学習を強力にサポートします。また、このシステムの導入は、英語教育の充実につながります。システム上には、生徒が練習に取り組んだ履歴や、スコアの伸び率が自動的に記録され、グラフ化されます。教員はこの客観的なデータを用いることで、「主体的に学習に取り組む態度」や「知識・技能」の観点を見取ることにつながります。それでは、実際に生徒が利用する画面のイメージについて、短い動画にまとめましたので、映像をご覧ください。まず、はじめに HelloWorld（ハローワールド）社の作成したアプリの説明動画についてご覧ください。AI 英語学習アプリですので、英語での説明になりますが、字幕が出ますので、そちらをご覧ください。

（アプリ説明動画再生）

それでは次に、実際の操作画面についてご説明いたします。今回は HelloWorld（ハローワールド）社さんに動画を作成していただきました。本日は短い時間ですので、紹介する動画については機能の一部となります。ご了承ください。

はじめに子どもたちは、自分のアカウントでログインします。ログインについては、Google アカウントによるシングルサインオンによりログインできます。1 つ目は音読機能です。子どもたちは、教師側から出された課題を選択します。今回は右上の画像の方が生徒役です。はじめに AI の見本の発音が流れます。

（アプリ操作画面の動画再生）

右上の子ども役の方が発音を行います。発音が全て終わると評価が出てきます。子どもたちは何度も発音練習をすることができます。2 つ目はやりとり機能です。やりとり機能では、テーマに従って AI と英会話をを行います。そのテーマについても教師側で設定することができます。

(アプリ操作画面の動画再生)

今回は、横に発音をした英文が表示されます。また、今のように単語が思い浮かばない場合には、その単語を検索することもできます。

(アプリ操作画面の動画再生)

さらに、画面にありますけれども、英文を翻訳した日本語を表示させることもできます。子どもたちのレベルに合わせて、その表示を出したり、出さなかったりと変えることができます。

(アプリ操作画面の動画再生)

やりとりについては、自動録音されて、自分の英会話を聞き直すこともできます。英会話がひと通り終わると、今の画面のような形で、リフレクションメッセージが表示され、今回の英会話の評価がなされます。

ご覧いただきましたとおり、非常に取り組みやすく、生徒が自発的に学べるシステムとなっております。なお、本日この後 12 時より、近隣の横須賀市立常葉中学校におきまして、実際に生徒たちがこのアプリを使って英語の授業を行っている様子取材いただける場をご用意しております。子どもたちが、アプリを使って主体的に取り組む姿を、ご覧いただければと思います。私からの説明は以上となります。

■質疑応答

記者

自分の時にあったらなと思います。確認ですが、昨年、寒川町でも導入していた実績があるようですが、寒川と横須賀の違いを教えてください。

教育指導課長

寒川町は文部科学省の指定を受けまして、町ではなく学校の方で取り入れているとお聞きしております。横須賀市については市全体で、全部の学校に導入しているところでは、県内初という形になるかなと思います。

記者

分かりました。ありがとうございます。今、中学生は端末としてはタブレット端末を持っていて、そこにアプリを入れるということでしょうか。

教育指導課長

おっしゃるとおりです。1 人 1 台端末、クロームブックがございますので、そこに入れていくような形になります。

記者

クロームブックですが、これは今の運用では、生徒は自宅に持って帰ることができますか。

教育指導課長

現在は、持ち帰ることができるようになっています。

記者

そうしますと、家庭環境によっては、Wi-Fi が通っていない家庭もあるかと思います。そのような場合はどのような支援をされるのでしょうか。

教育指導課長

持ち帰りの時に、ご家庭の調査を行いまして、Wi-Fi がない場合には、お貸しする体制を整えて、

持ち帰る形になっています。

記者

ありがとうございます。市長でも、教育長でもお答えいただければと思いますが、数値的なことも含めて、導入してどのような結果が表れれば良いとお考えでしょうか。

教育長

全国的な課題として、英語力については文科省の調査等でも、やはり表現する、インプット・アウトプットでいうと、アウトプットの方に課題があります。具体的には、「話す」であり、「書く」である、というところです。この点については、私もそうだったのですが、苦手意識というか、やはり、一番は書いてなんぼ、話してなんぼの世界だと思います。私自身も大人になってから留学をしたときに、英語を大量にやらなければならなかったのですが、やはりシャドーイングも含めて話すこと、ライティングも膨大に書くことです。これが即時にフィードバックが戻ってくことで、自分の中で学びのサイクルができます。今回、活用率も見えますので、この実態の変化が、最初に見るべきところだと思います。もちろんそれが、後々、定量的な調査で結果に跳ね返ってくればと思っていますが、まずそこを見ていきたいと考えています。

記者

ちょうどこの世代は、自分の発音、自分もそうでしたが、あまり大きな声で読むのが恥ずかしいみたいな、そういうことがあるかと思います。そもそも、そこは中々指導が難しいと思いますが、どのようなケアを考えていますか。

教育長

授業で「話してごらん」と言うこと自体が負担になっている状況が今までありました。先生たちは、配慮してグループ別にするなど、ケアはしていますが、まさに、そこを改善するために、自分の中で端末とキャラクターと一緒にやっていただくというところだと思います。家も含めて、学校外も含めて、本人がやりやすい場所でやっていただくことを丁寧に指導していきたいと思っています。

記者

最後に、この事業は当初予算に入っていたかと思いますが、事業費を教えてください。

教育指導課長

3年間の契約で約8,000万円となっています。正確に言いますと、8,496万8千円です。

記者

3年間ですか。

教育指導課長

3年間です。

記者

確認ですが、今回の一番の特徴としては、市内全校で一律に入れることがポイントだという理解でよろしいでしょうか。

教育長

外形的な特徴としてはそうなのですが、同じ1つの学校だけでなく、全体としてアウトプットや普段からの英語への前向きさを育てていく学習文化というか、そういった慣習の定着を狙って、全体に一気に入れる判断をしています。

記者

ありがとうございます。今時、こういったものを使うケース、学習の流れは多々あると思うので、

市の事業の特徴としては全校一律で、市内全校だということですね。それで、先ほど寒川町の話もありましたが、今回のこのアプリ「World Classroom (ワールドクラスルーム)」に関して、全国での導入事例、県外ではありますか。他の自治体で全校一律に行った例は、県外ではございますか。

教育指導課長

「World Classroom (ワールドクラスルーム)」自体を、自治体全体でやっているところは、横須賀市が初になります。いわゆる AI アプリ自体を、市全体に入れるという事例はなく、文科省の指定を受けるなど、学校ごとにいれるような事例はお聞きしております。

記者

神奈川県内で、市内全校一律に導入というよりも、全国で、全校一律に自治体が入れるのは初ということになりますか。

教育指導課長

全国の自治体については資料がございませんが、まだこれを一律に導入しているのは、非常に少ないと聞いております。

記者

つまり、少なくとも県内では、自治体の中での一律導入の事例はないと確認できているけれども、全国の他の自治体で同じような事例があるかは確認できていないということでしょうか。

教育指導課長

はい。神奈川県では確認しております。(※)

(※) 記者会見終了後、全校一律の導入が、「全国初ではない」旨、報道機関に情報提供。

記者

県外ではあるかもしれないですね。先ほどプレゼンの中でもあった、HelloWorld (ハローワールド) 社が制作、運営しているアプリということでしょうか。

教育指導課長

おっしゃるとおりです。

記者

当初予算の数字ですが、この費用は具体的に何の数字でしょうか。アプリの代金なのか、それともそれに関わる人件費や管理費なども含んでいるのでしょうか。

教育指導課長

この費用につきましてはアカウント料です。アカウントを配布する 3 年間のアカウント数の費用になります。

記者

アカウント数はどれくらいでしょうか。全市立中学校の全生徒数でしょうか。

教育指導課長

3 年間の延べアカウント数で、24,357 アカウントです。

記者

3 年間の延べということは、1 年あたりだと、大体 3 で割った約 8,000 ということでしょうか。対象として使う生徒は 1 年生から 3 年生まで全員ですよね。それが市内全校。それは市内で何人いるのでしょうか。この約 24,000 を 3 年間ということで、3 で割って、大体 8,000 でよいのでしょうか。

教育指導課長

おっしゃるとおりです。ただ、生徒数はずっと同じではないため、少し多めに見積もっています。

記者

先ほどの効果の目標に関わるのですが、今の横須賀市の中学生の英語の学力水準は、どのくらいなのでしょう。全国学力・学習状況調査など、何か数値的なものが出ているかと思うのですが。

教育指導課長

全国学力・学習状況調査ですが、全国調査を 100 とした場合、横須賀市は 100.1 や 100.2 です。年度によりますが、ほとんどの場合、上回っており、英語の力についてはと認識しています。

記者

100.1 や 100.2 というのは、英語に関してということでしょうか。

教育指導課長

はい。

記者

それが、具体的に数値では、今は目標を設けていないということですか。

教育長

現時点では設けていません。具体的な数値はこれから考えていきます。英会話を限定とした数値はありませんので。

記者

測れない要素があるということですね。分かりました。ありがとうございます。

市長

私も英語が話せません。アメリカに行くたびに、内心、^{じくじ}忸怩たる思いがあって、横須賀の首長は「英語は当然喋れるのでしょう」と、いつも言われます。歴代の首長で話せないのは私だけではないかと思っています。情けない話で、これだけアメリカ人がたくさんいて、私の周りにも話せる人がたくさんいて、どうして底上げができないのだろうと、いつも悩んでいたことは事実です。むしろ私もこれが欲しいくらいです。夢として思っていたのは、できることなら、横須賀の子どもたち、小学生全員が英語を喋れるくらいのレベルになればいいなとずっと思っていました。それがやっと AI を使うことで、具体的なイメージができ上がったことがすごく嬉しいし、私のような思いをしない子どもたちがどんどん育ってきて、「横須賀の子どもたちがみんな英語を喋れる。当然だろうな」と言われるような社会になってくれればいいなという思いで、私は非常に期待しています。

記者

市長に、改めてお伺いします。この AI アプリ導入を通して、多様性のある横須賀市の生徒たちに期待することを、改めてお願いします。

市長

喋れるということは、言葉によって、いろいろな価値観、多様性を具体的に感じるができる。それが大切なのだと思います。そのためには、英語が喋れないと、違う価値観に触れることができません。会話を通じながら様々な価値、多様化に関して実体験し、感性に取り込める作業が、子どもの時からできることは、国際社会に向けて非常に重要なことなのではないかと考えています。

■案件外質疑応答

記者

今日、青森でも線状降水帯が発生しました。千葉でもありました。千葉は東京湾を越えるとすぐ横須賀にかかります。熊本の地震もありました。改めて災害対策、今回、雨に関して、水害対策に関して市長のご所見をお願いします。

市長

徹底して市長室長には指示をしています、あらゆることを想定して、いつでも起こり得るということ、それを想定して、様々な指示をしています。具体的には市長室長から説明します。

横須賀市 市長室長

具体的には、特に最近、急な豪雨が課題だと思っております。その際の我々職員の危機管理体制、連絡体制の構築、これはすでに構築しました。あとはこれからの課題ですけれども、例えば、台風は数日前に予報があって風水害時避難所などの準備ができますが、今回のように急な豪雨に備えて、どう備えるかというところは、市長からも指示を受けて検討しているところでございます。ここは目下の最大の課題だと思っております。日中等であれば避難所となる施設にも職員がおりまして、すぐ開けられますが、土日や夜間に緊急なゲリラ雷雨などがあった場合、どう対応するかを検討しています。

市長

難しいです。暑いとき、寒いとき、それから時間帯、その時に何ができるかシミュレーションしないといけないと思っておりますが、どこまでシミュレーションできるか。結局は職員がやらなければならない。自助・共助・公助含めて洗い直しています。ただ、自助はもう無理であろうと思います。最低限のことはやっていただきますが、共助の部分を公助に組み込んでいくという作業は絶対に必要になります。3,000人の職員に何ができるか。もう1回、ネットワークの組み直しですとか、どこに散らばっているのか、消防団も含めて、消防局も含めて、もう一度この時期にこうなったらなど、災害の大小、形態によって様々なことが考えられます。それを具体的なシミュレーションをしていかなければならないと思っております。ただ、どうしたらいいか分からないところなので、だからこそ、職員に指示しているところです。

前回の本会議でも申しあげたとおり、今までは、災害時の粗大ごみなどは、いくつかの街区公園で、共助で、自治会の皆さんに管理してもらうということだったのですが、自治会の皆さんは、災害時にはそれどころではなく、対応できないのでやめるように言いました。基本的に、街区公園は全部集積所にするべきだろうと。その時に町内会の人たちに頼っても、大変な状況の中でできないだろうと思います。近くの職員が駆けつけて、その管理にあたるなど、あの状況を見て何ができるかを、もう1回、振り返っている状態です。想像力を逞しくしなければなりません。具体的に、今、何ができるか。今のところイメージが先行して、個別具体的な話になっているので、これを総合的に考えていかなければならないと思っております。

記者

熊本の避難所では、物資が足りないという話が出ていて、一方で倉庫には物資が余っていて、目詰まりを起こしてしまっているという課題がありました。そのあたりどのようにお考えでしょうか。

市長

横須賀の場合は、ご承知のとおりトンネルが多く、寸断されたら終わりです。そのため、集積場所を、地域にかなり散らばせなければならない。その作業をしていかなければなりません。それから海、海路を利用しなければなりません。それは当然のことながら、目詰まりを起こさないようにと考える必要があります。横須賀の場合は、16号線が詰まってしまうとおっしゃいますから、目詰まりを起こさないためには、集積場所を散らばらせなくてはなりません。集積場所もかなりの部分を増やさなければならない。それから山と坂、崖がありますから、崖地の皆さんをどうするかと考えると、かなり難しくなってきます。そうすると民生委員、消防団の皆さんを総動員しながら、それ

どれ、どこに、何があるか、安否確認もしなくてはならないとなると、自治会の皆さんを訪ねていかななくてはならない。そしてそのフォローをネットワーク化した職員がやっていかななくてはなりません。ある状況で、あるシミュレーションで、この時期に、これくらいの震度、雨、津波があった時にどうするか。まず1回、具体的なものを立ててみて、その上で最悪の場合を考えたシミュレーションを行ってみることが一番大切だと思っています。

記者

これから整備されるかと思いますが、大矢部弾庫に基地を作るかと思いますが、長坂に備蓄庫を作る予定だと思います。

市長

そのとおりです。作る予定です。ただ、心配なのは、間に合うか、明日起きたらどうしようかとそればかり考えています。

記者

それもそうですが、完成して、災害が発生した場合、大矢部、長坂のあの丘陵地帯からどのように運び出すのでしょうか。

市長

それはまだできていません。これからやっていかなければなりません。備蓄倉庫を作りましょうという段階です。寸断されて、そこから目詰まりを起こさないようにするのは、まだ具体的に詰められていません。

記者

そこは、まだ、実際にロールプレイングをやってみるという段階にはないのでしょうか。

横須賀市 市長室長

市長から、陸路が寸断されるという話がありました。これは可能性が大いにあり、最悪を想定して話をいたしました。仮に陸路が一定程度確保できる場合は、今年度、エコミルの横に防災備蓄基地ができますが、合わせてそこに備蓄品がたくさん来ます。平時から民間の運送業者に委託をし、日常の在庫管理や、いざというときの搬送体制を準備してもらおうと思っています。また、陸路がダメになった場合に備え、今年度、公園墓地にヘリコプターが災害時に離着陸できるよう整備しますので、空路、それから陸路・海路と、これからさらに踏み込んでいかなければならないと思っています。

記者

ありがとうございます。次に災害つながりで恐縮ですが、ネパールで大きな土石流がありました。横須賀市もネパールと交流されていますが、現状考えている支援等の予定はありますか。

市長

今のところ詳しい情報は入っていませんので、何が支援できるか分からない状況です。ただ、横須賀市と提携しているネパールのバラトプル市は、問題がなかったとお聞きしています。ただ、その周辺には関係者もいらっしゃると思います。情報が入ってこないのが何ができるか分からない状態です。できれば、何かご支援できることがあればと考えています。

記者

昨日、逗子市の桐ヶ谷市長が三選不出馬を表明されました。市長とは、これまで MU（三浦半島連合）構想ですとか、4市1町で一緒にやってきました。残りまだ任期がありますが、ご所感あればお願いします。

市長

残念です。三浦市の吉田前市長も（選挙で）敗れました。桐ヶ谷さんも吉田さんも同志です。一緒になって三浦半島を盛り上げていこうと言った仲間が 2 人いなくなってしまう。これから、新しい流れができると思いますが、三浦半島連合という意味はつないでいきたいので、是非、辞められた後も、2 人には今後も様々な意味でご支援をいただければと思います。

記者

三浦半島連合の話がありました。31 日に三浦市の出口市長が、市民が望んでいない中、関係部署を通さず、独断で陳情書を書いて提出するよう提案したとありましたが、市長はこの件についてどう受け止めていますか。

市長

困りましたね。それだけうまくいっていなかったということと、政治をよく知らないのではないかとこのところがあります。今は一緒になってやらなければなりませんので、これは批判ではありませんが、政治経験も短く、教育委員会と対立していてうまくいかなかったというようですが、そんな手法はないだろうと思います。もっとしっかり対話を重ねて勉強されたほうがいいのではないかと思います。

記者

市長は、そのような陳情書は市民に書いたことはありますか。

市長

あるわけじゃないですか。間違ってもないです。

記者

話が変わりますが、ジョージ・ワシントンが中東へ派遣され、改めて横須賀市への影響や、受け止めはいかがでしょうか。

市長

同じ話になりますが、米軍の運用に関する事項については、お答えは差し控えさせていただきます。

記者

星条旗新聞などで、中東へ行った米兵の士気の低下や、ストレスが溜まるなどが報じられていると思います。ジョージ・ワシントンが横須賀に帰ってきた時に、米軍、米兵の、例えば、どぶ板通りなどでの治安の悪化などの懸念みたいなものはいかがでしょうか。

市長

（過去）何度も（米軍関係者も）市民だという話をしています。それはもう、安心はしています。

以上